

知的障害教育における生活に生きる国語の指導 —文部科学省著作本『☆教科書』の活用—

1 国語教育の意義

言葉や文字を用いて互いに伝え合うことは、私たちの生活の基盤であり、言葉や文字を通して、人々の思い、あるいは出来事を知ることができます。知識・情報を得たり、理解や思考もできます。そして何より自分が伝えたい気持ちや考えを表すことができ、出来事やその様子を伝えることもできます。これらは、広い意味の国語教育によって育成されるものと考えられています。

知的障害教育においても、子どもたちのニーズに応じて、国語に関する種々の能力を育て、国語への関心や主体的な学習への態度を育成し、生活を円滑に、豊かなものにする、さらに、生活がより豊かになるよう、人とのコミュニケーション能力を重視し、「伝え合う力」を養い、伸ばすことを目標としています。

この目標は、「聞く・話す」「読む」「書く」の観点別に段階的に構成されている「内容」を、子どものニーズに応じて適切に選択し、どの子どもも主体的に取り組める状況で実践することにより、適切にニーズに応え、教育的に支援する国語となります。

2 国語の指導における留意点

① 児童生徒個々の違いを踏まえて実践します。

知的障害の状態、言語発達面、年齢や生活経験、興味や関心、意欲などの違いに留意すること。その上で、題材や内容を変えたり、教材を工夫したりするなど、個に応じた方法で適切に指導する。

② 生活に結び付いた実際的な活動を中心にすえ、実際的な状況下で総合的に指導します。

その時期の生活に自然な形で、必要な内容を関連付けたり、単元化して目当てや見通しをもちやすくしたり、総合的な活動を積み重ねやすくしたりする。

③ 学校生活全般における国語の諸条件を加味します。

生活の中には、人との関わりや情感、認識力や概念、意欲や情緒的安定などの条件が含まれる。これらをよく加味して生かすことが大切である。

④ 主体的な活動を多く取り入れ、意欲的に力を発揮できる国語の指導とします。

見通しのもてる単元活動や学習課題が分かる題材では、子どもは主体的に活動できる。成功体験を多くもてるように支援し、子どもの力が無理なく何度も発揮される工夫が大切である。

⑤ 日々の生活を高め、豊かにする国語の指導とします。

聞く・話す・読む・書くこと自体が楽しみとなり、そのことで生活が円滑になったり、主体的でよりよい姿が実現されたりするよう工夫する。

⑥ 領域・教科を合わせた指導や教科別の指導においては、生活に生かし、活用する点を重視して、他の教科・領域との関連を図りながら、学校生活全般を通して総合的に行うようにします。

3 国語科の指導と教科書

特別支援学校学習指導要領の知的障害特別支援学校での各教科(国語、算数・数学、音楽)の目標・内容に対応して作成されているのが、文部科学省著作教科書(いわゆる☆本)です。国語については、小学部の1から3段階、中学部の4段階の内容に対応して、『こくご☆』、『こくご☆☆』、『こくご☆☆☆』、『国語☆☆☆☆』があります。

以下に各段階の構成及び「聞く・話す」「読む」「書く」観点の〈概要〉を示します。

小学部 ☆1段階…知的発達が未分化であること、生活経験が少ないことなどから、主として教師の直接的な援助を受けながら児童が体験したり、基本的な行動を一つ一つ身に付けていく段階。⇒〈事物や話し掛けに注目し関心をもつ。簡単な応答・身振りで表現する。絵や模様に関心をもつ。書くことに親しむ。〉

小学部☆☆2段階…教師からの言葉掛けによる援助を受けたり、動作や動きを模倣したりして基本的な行動を身に付ける段階。⇒〈話し掛けに親しむ。簡単な言葉で話す。文字や図などに関心をもち、読む、書く。〉

小学部☆☆☆3段階…児童が主体的に取り組み、社会生活につながる行動を身に付ける段階。⇒〈話のあらましが分かる。経験したことのあらましを話す。簡単な語句や文を読む、書く。〉

中学部☆☆☆☆4段階…生活年齢や経験を重視するとともに、他人との意思疎通や日常生活への適応に困難がある生徒にも配慮しつつ、生徒の社会生活や将来の職業生活の基礎を育てる段階。⇒〈話の要点を理解する。経験したことの要点を伝える。簡単な語句や文を正しく読む。簡単な手紙などの内容を順序立てて書く。〉

4 教科書の活用の仕方

国語科の指導において、この教科書をページ順に使用したり、一斉にどの児童生徒にも同じページを使うといった用い方をする必要はなく、適切な題材を効果的な方法で使うようにします。その際、児童生徒個々の興味・関心や発達の段階及び特性等を把握するとともに、国語科のどの段階のどの内容が求められるかについて、個別の指導計画を作成して明確にする必要があります。さらには、教科書の活用も含めて、どの場や時間にどのような国語科の指導を行うかについても計画し、教員間で共通理解することが望まれます。以下は活用例です。

小学部1段階(こくご☆)

- 食べ物や乗り物の名前を言ったり、覚えたりする(題材「まほうのはこ」「おーい」など)。
- 歌を歌ったり、振り遊びをしたりする(題材「くまさんくまさん」季節の「え」など)。
- 模倣遊び、ごっこ遊びへの発展を図る(題材「あなたはだあれ」「ほっとけーき」など)。
- 日常生活の動作を再現して遊ぶ(題材「ぼくのいちにち」「わたしのがっこう」など)。

小学部2段階（こくご☆☆）

- 買い物ごっこ、ままごとなどへの発展を図る（題材「やってみよう」「なまえなーんだ」「あつめてみよう」など）。
- 集会活動、交流活動での発話を促すことへの発展を図る（題材「おおきなこえでいってみよう」「おはなしできるかな」「どんなきもちかな」「やってみよう」「なまえなーんだ」「あつめてみよう」「くわしくはなそう」など）。
- 身近なものの名前を覚えたり、確認したりすることへの発展を図る（題材「おはなしできるかな」「どんなきもちかな」「やってみよう」「なまえなーんだ」「あつめてみよう」「くわしくはなそう」など）。
- 文字への関心を引き出し、読むことへの意欲を促す（題材「おなじとちがう」「ひらがな」など）。
- 体験を絵や文字で表すことへの発展を図る（題材「ひらがな」「かいてみよう」など）。

小学部3段階（こくご☆☆☆）

- 自己紹介や司会の要領を覚えることへの発展を図る（題材「かんげいかい」）。
- 電話の使い方や話し方を学ぶことへの発展を図る（題材「でんわ」）。
- 楽しい体験を適切に言葉で表現することへの発展を図る（題材「かんげいかい」「たのしかったえんそく」「でんわ」など）。
- やさしい語句や文を意欲的に読むことへの発展を図る（題材「のりもの」「むし」「はな」「おじいさんとねずみのおはなし」「かじ」「プレゼントはなあに」「プレーメンのまちのおはなし」など）。
- やさしい語句や文に関心をもって書くことへの発展を図る（題材「ひらがなをかこう」「ぶんをかこう」「えにっきをかこう」「たよりをかこう」など）。

中学部4段階（国語☆☆☆☆）

- 買い物学習や社会見学などの実際の単元活動への発展を図る（題材「スーパーマーケットの見学」「いろいろな標識」など）。
- 様々な文章を意欲的に読み、理解することへの発展を図る（題材「山の家へ行って」「絵はがき」「ねぼうしたねこ」など）。
- 感想を話し合うことへの発展を図る（題材「ぼくのカレーライス」「ないた赤おに」など）。
- 自分で詩を書いたり、俳句を作ったりして楽しむことへの発展を図る（題材「詩」「俳句」など）。
- 日常で実際に文を書いたりまとめたりすることへの発展を図る（題材「メモ」「日記・日誌」「はがき・手紙」「文集」など）。
- 運動会、作業販売会などの行事やイベントへなどの案内、または振り返ってのまとめを書くことへの発展（題材「新聞」「発表会・学校祭」「作文」「文集」など）。

5 指導の実際

知的障害特別支援学校では、領域・教科を合わせた指導や教科別の国語の指導、また、行事等の特別活動の中で国語科の内容も含んで実践されることもあり、様々な形態で行われています。その中での教科書を活用した指導例を紹介します。

「日常生活の指導」と国語

学校生活の流れに沿って、よりよい生活活動への支援、実際の生活の場で、児童の生活に生きる指導を適切に行いやすい。

(指導例) こくご☆ 「ぼくのいちにち」「わたしのがっこう」

- ・朝の会で、あいさつ、名前、返事、一日の学習予定、給食の献立 等

「遊びの指導」と国語

児童が楽しんで、よりよく遊べるよう、遊びへの支援を行う。遊びを活発にすることで、意欲的な活動や仲間との関わりが発展するように計画する。

(指導例) こくご☆☆ 「やってみよう おおきなだいこん」

- ・紙芝居やペープサートなどを使って導入し、げき遊びへ発展 等

「生活単元学習」と国語

その時期の生活のテーマに沿って、関連する活動を組織的に経験することによって自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習する。

(指導例) こくご☆☆☆ 「でんわ」「かいもの」

- ・単元「〇〇へとまりに行こう」において、実際の場面で家へ電話したり、夕食作りの材料を買いに出掛けたりする

「作業学習」と国語

作業活動を中心とした総合的な取組の過程で、材料の注文に電話をかけたり、ファックスを書いて送ったり、バザーでの客との応対、伝票の整理等実際的な状況下で学習する。

(指導例) 国語☆☆☆☆ 「作文」「メモ」「日記・日誌」「はがき・

手紙」「文集」「新聞」「発表会・学校祭」 等

- ・作業班の仕事などを発表するときや日誌・報告文などを書く際 等

「教科別の指導」と国語

時間を設けて、国語の内容の学習に取り組む形態である。児童生徒個々の言語の発達、意欲、興味・関心、特性等を踏まえ、力の違いが大きいため、学習集団に配慮する。例えば、その時期の生活単元学習の内容と関連させることで、児童生徒にとっては分かりやすくまとまりのある生活になる。

(指導例) こくご☆☆ 「なまえなーんだ」 こくご☆☆☆ 「かいもの」

- ・その時期の単元「学校へとまろう」での夕食作りの買い物と関連させて「国語科」の時間に取り扱う。